2009 年 1 月 5 日

国際カフェサロンの試みと展望

シンビオ社会研究会　理事　久郷明秀

◆国際カフェサロンの主旨

シンビオ社会研究会では社会と科学技術の接点を強めるため、英国で発祥したサイエンスカフェを模して “国際カフェサロン” を開催しています。ご承知のとおりサイエンスカフェは科学者が研究の意義を社会に語りかける試みとして始まりました。そこで私たちは科学者が市民と語り合う場として、初めからテーマを科学技術に限定せず、社会で話題とされているトピックスを広く取り上げて国際的な視点から議論し、そこから科学技術の意義を確認し合う場を提供するという企画を始めました。まだ時間が浅いので試行錯誤の段階ですが、ここにその様子をご紹介します。

◆カフェサロンの進め方

私たちの国際カフェサロンは、「市民と研究者が気になることを一緒に語り合い、互いの視点を理解し合うために海外の視点を入れて議論し、これを通じて社会に科学技術の面白さが拡大することを目指しています」ということでしょうか。

そこで私たちは一つのテーマで日本在住の海外の有識者に 1 時間ほど講演してもらい、その後、ファシリテータの進行で講演者と聴衆による質疑応答、最後は懇親会で親交を深めるというやり方を採っています。使用言語は原則英語ですが、適宜、機微なところは理解を助けるために日本語を交える方式です。

通常のシンポジウムやパネル討論との違いは、カフェサロンという名の通り、先ずテーマを設定して、あとは科学者と一般市民がお茶を飲みながら気楽な雰囲気で言いたいこと・聞きたいことを互いに話せる場を提供しようとするところにあります。

◆これまでの実績

国際カフェサロンの話題として2007年度には「国際文化比較論：文化・科学・技術と教育の関わり」、2008年度は「日本人と欧米人のリスク認知の違い－リスク情報をどう捉えるか？」というテーマを取り上げました。

これまでの参加者は、2007年度は、米国、仏、ノルウェー、日本から4名の講師を招き、それぞれ自らの体験を基にした日本社会の文化的特徴を述べてもらった後でパネル討論していただき、さらに聴衆と意見交換する形式で、社会人・教育界・大学生・高校生など約40名の参加がありました。

2008年度は、2007年度の講師発表時間が少々長く、聴衆との質疑の時間が物足りないと感じられたので、講師を二人に絞り、フランスとアイルランドの方を招いて、欧米と日本のリスクのとらえ方について研究成果や体験を述べてもらった後、パネル討論を行わず、直ちに聴衆を交えて意見交換する形式で、社会人、大学関係者など約30名の参加を得て開催することができました。（これまでの2回のカフェサロンの記録はシンビオ社会研究会HP*1*2を参照下さい。）

工夫といえば、初回のパネル討論や1･2回目の意見交換の場では、社会人と研究者を繋ぐ新鮮な視点から議事を進行させるため、大学院博士課程の若手研究者にファシリテータを務めてもらいました。これで講師と聴衆あるいは聴衆間の活発な質疑を引き出すことに成功しています。

また会場配置は、初回はパネリストが壇上に並び、聴衆はスクール形式で着席する配置でしたが、2 回目は講師と聴衆の親密性を一層高めるために机を取り払い、椅子だけを講師を中心とする扇型に配置しましたところ大変好評を得ました。

◆今後の展望

国際カフェサロンの目的は冒頭に述べたとおり、社会と科学技術の接点を強めることであり、そのために気楽に有識者と一般市民が相互に対話できる場を提供することです。

目下、社会と科学技術の接点を強める方策について試行錯誤を続けているところですが、国際カフェサロンは、海外の視点を取り入れて自らの認識を客体視することで偏狭な思考を回避することが可能となります。これによってこれまでわが国の社会で陥りがちな状況、すなわち科学技術が専門化・細分化してしまった結果、科学技術の意義が日常から遠くに離れてしまい、有意義な新しい試みが、「良く分からない」、あるいは「誤解」から短絡的に「危険なもの」として忌避されてしまう現状を打破する一つのやり方だと考えています。

今後、テーマの裾野を広げ、参加者層を拡大することが必要ですが、これまでのところ参加者は時間に余裕があり、取り上げられたテーマに関心を持つ社会人と大学関係者に限られているようです。そこで先ずは開催日をこれまでの金曜日午後から土曜日に移して、高校生や大学生、そして週末に仕事を終えた社会人が気楽に参加者できる開催方法も考えているところです。多数の皆様のご参加をお待ちしています。

＊1　http://sym-bio.jpn.org/file/file_20071110160613.pdf

＊2　http://sym-bio.jpn.org/file/file_20081103002647.pdf

2007 年（パネル討論の模様

2008 年（講師との質疑の模様）